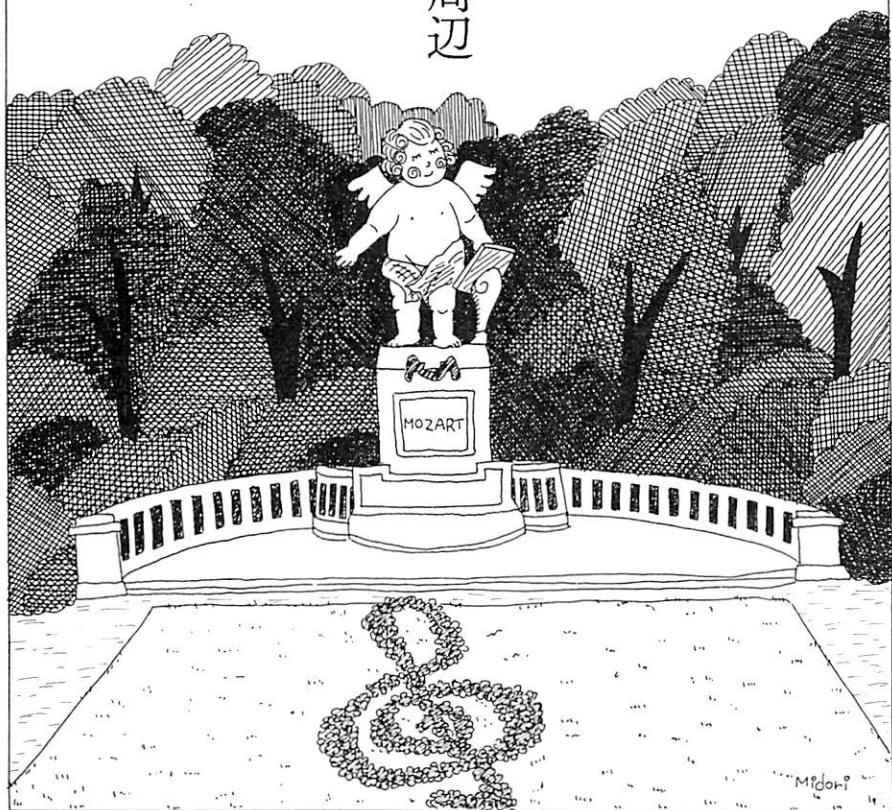


作曲家達とその周辺



病は気から？

バッハの音楽を何よりも愛する人々の中には、勤勉で探求熱心、加えて完璧癖の強い人が多いという。

ドビュッシーを信奉する人は、ドビュッシー自身のように分裂気質であるか、少なくともそのような心理に傾きやすいらしい。ドビュッシー・ファン、端的に「牧神の午後」のファンはこの曲に魅せられたが最後、それこそレコードが擦り切れる程聞きはしても、ドビュッシーの他の作品を聞いてみたい、とまでは思わな
いらしい。まるで理想の乙女に酔いしれた青年の如くである。

チャイコフスキーの有名な交響曲「悲愴」を内因性鬱病の患者に聞かせると、症状が悪化する事が多いという。チャイコフスキーは鬱病に生涯悩まされていたが、その原因が内因性のものであろう、という精神科医の憶測は、こうした実験の積み重ねによって引き出される。

このような、過去の人物の病歴や死因などについての追跡調査や研究は、パトグラフィと呼ばれ——その結果が人間の役に立つ立たないは別として——今日では学術の一分野となっている。現代の病理医学の知識によって過去の偉人の本当の死因を推測し直すのもスリリングな事であるし、精神医学の面から芸術的創造行為に携わってきた人物の心の内面を探ってみるのも興味深い。探られる人間には迷惑な話であるが、有名な音楽家達の病歴は、今日にまで残された多くの手紙や日記その他を資料として、かなり詳しく研究されている。時をさかのぼる程、残された記録が少なかったり曖昧になり、その結果としての推理が相応の物にしかかなり得ないのは仕方のない事ではある。

例えばウィーン、シュテファン寺院の事務局死者台帳に記載されているモーツァルトの死因となった病名「急性粟粒疹熱」が、現代の医学において何を指しているのかは、推測の域を出ない。当時モーツァルトと

面識のあったウィーン大学医学部のグルデナー教授の診断によると、モーツァルトはリユーマチ性炎症熱に冒されていたという。その頃、急性炎症性疾患にはまず消炎処置として瀉血しゅけつが行なわれた。この処置によって一回通常三百五十〜四百グラムの血液を体外に排出させたが、これを週に六回から八回まで行う事も珍しくなかったらしい。これによってモーツァルトは、おそらく二リットル近い血液を失ったと推測される。

現代医学の知識を駆使しての推定では、モーツァルトはリユーマチ熱より心臓弁膜症（大動脈弁口狭窄）がおこり、上述の瀉血による貧血も重なって結局心不全で死亡した、と考えるのが最も妥当な線であるという。モーツァルトがサリエリに毒殺されたのではないか、という推理ももっともらしく伝えられているが、学術的には証明されておらず、単なる風説のようである。

時代の背景のおかげで興味深い記録にめぐり会えることもある。ウィーンで一世を風靡した精神分析医フロイトとその患者、グスタフ・マラーについての記録はその好例である。

マラーは五十才の時に強迫神経症に悩まされ、フロイトの診察を受けた。フロイトの行なった精神分析の結果は「暴君だった父親が母親を苛酷に扱った幼児体験を回復しようとして強制的に妻を悩まし、自分を苦しめてきた事がその原因である」というものだった。マラーは今日という「分裂気質」に属し、分裂病発病の危険は大いであつたらしい。専門家が聞くと、彼の音楽の中には子宮願望、希死念慮、エディプスコンプレックス、未分化な攻撃性などが混在しているのだそうだ。

たとえ時代が比較的新しくとも、故意に真実が隠匿されてしまう場合も起こる。チャイコフスキーの死因をめぐっての不自然な不明瞭さは、その一例であろう。

当時ロシアにおいて、男色行為はそれが公になると市民権を剥奪され、シベリアに追放される程の厳しいタブーであった。この件に関するチャイコフスキーを相手どつての告訴にからみ、彼が自殺を強要されたの

か、故意に毒殺されたのか、あるいは世間一般に流布されている通説のようにコレラで死んだのかを明白にするための重要な証拠は、第二次世界大戦以降ソ連当局によって秘匿または破棄されている。数少ない個人所有の資料などもその大半は大戦中に失われ、事実上永久に闇の中に葬られてしまった。

「梅毒」という病名も、音楽家のパトグラフィーの中で散見される。

梅毒による脳障害、並びにそれを起因とする各種の機能障害および精神障害に冒される音楽家は少なくなかった。しかし興味あることに、「不治の病」であった梅毒が最終的に脳を冒す数年前、一時的であるにせよ芸術家としての創作力が量的にも質的にも異常なほど昂進する事実が、多くのケースにおいて認められている。

「ルチア」「愛の妙薬」を書き、上述の状態の時には僅か一週間余りで「ドン・パスクアーレ」を完成したドニゼッティ、梅毒がもとではほぼ全聾になりながらも交響詩「わが祖国」その他の名曲を作曲したスメタナ、沢山の歌曲を残したヴォルフ、そしてシューマンもわかり。音楽家ばかりでなく哲学者ニーチェ、文学者モーパッサンなどにも同様の顕著な変化がうかがえる。

美食家で有名なのはバッハ、ヘンデル、ロッシニ。みな大食漢で肥満していた。バッハもヘンデルも白内障に悩み、脳卒中で亡くなっているのも、あながちこの肥満に無関係ではない。ロッシニの食べ物に対する興味は異常な程で、今日でもフランス料理のなかで『ロッシニ風』との名が冠されたものがひとつやふたつではない上、晩年にはオードブルやデザート、果物などの名前をそれぞれにつけたピアノ小品集まで作曲している。オルガンの名曲を残したマックス・レーガーはホルモン失調症のせいもあってか、正に動物的とまで言える程の食欲の持ち主であった。

興味深いパトグラフィーのひとつとしてベートーヴェンの病歴も忘れてはならないだろう。ベートーヴェンの直接の死因は肝硬変であった。晩年には病変の苦痛を和らげるためにワインを多飲し、病状をますます悪化させている。

ベートーヴェンの容姿はおでこが突き出し、鼻根部が深く凹み、鼻はあぐらをかき、あばたの跡があり；と、お世辞にも美形とは言えなかったようである。あばたについては後天的に天然痘に疾患したと考えられるが、その他の所見は先天性梅毒特有のものであり、ベートーヴェンが生涯悩んだ難聴もそこに起因している、との見解も存在する。同様に完治することのなかった慢性の下痢は、どちらかというところ心身症のようなものだったらしい。

いずれも多少三面記事的要素を感じさせる内容だが、どうも妙に興味をくすぐられる話題である。

J・S・バッハ

一九八五年はヨハン・セバスティアン・バッハ（一六八五―一七五〇）の生誕三百年目の年として、ウィーンばかりでなく世界中の都市で、バッハにちなんだたくさんの催しが行なわれた。中でもバッハが生まれ生涯の活動の地であった東ドイツでは、大がかりなプロジェクトが組まれた。バッハと同じ年にはゲオルク・フリードリッヒ・ヘンデル（一六八五―一七五九）やドメニコ・スカラッティ（一六八五―一七五七）も生まれており、そちらの作曲家達の記念祭的行事も行なわれたが、大バッハの前で影が少々薄くなってしまうのは、致し方ないようであった。

バッハというと「バロック時代の大作作曲家」という知識に始まり、「偉大」「完璧」などのイメージと共